

2019年6月9日(日) 使徒言行録2章1-13節 西田浩子 牧師

本日9日(日)はペンテコステであり、また花の日・こどもの日でもある。

花の日礼拝は、1856年、アメリカのマサチューセッツ州の教会のレオナルド牧師の提案が起源で子ども中心の集会を行ったのが始まりである。アメリカでは一年中で最も多くの花が咲く季節であることから、子どもたちがお花を持って各施設を慰問するようになった。

今朝、この花の日を覚えて、南町田教会が創立した総合福祉施設みぎわホームの朝の礼拝でお花をプレゼントし、故花岡政吉南町田教会名誉牧師夫人花岡直子先生にお花をお贈りした。

聖霊降臨祭(ペンテコステ)は教会の誕生日とも言われ、キリスト教会にとっては降誕祭(クリスマス)、復活祭(イースター)と並んでお祝いされる大切な日である。

使徒言行録2章1節「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると」五旬祭の日は旧約では「七週の祭り」と呼ばれ、過ぎ越し祭の第二日から数えて50日を指す。

キリストが十字架で処刑されたのは過ぎ越し祭の期間中のことであった。その後キリストは三日目によみがえり、それから40日間にわたって弟子たちを教えたあと、天にあがっていった。そしてその1週間後の五旬祭の日、救い主キリストに代わってこの世に来たのが、助け主あるいは弁護者と呼ばれる、聖霊という神である。

ペンテコステの日、聖霊の臨在である、「聖霊の内在」(indwelling presence)と「聖霊の満たし」(The Fullness of the Holy Spirit)が同時に起きた。「聖霊の臨在」(Manifest

presence) は「聖霊の内在」(indwelling presence)「聖霊の顕在」(manifest)として分けられる。

イエスの弟子たちを中心にした、120人程の人々が五旬祭に集まっていた。そして「一同が一つになって集まっていると」「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、「一人ひとりの上にとどまった」。

一つに集まっていた一同というのは、前の章の1:13~14に出てくる弟子も含めて、1:15に登場する約120人の群衆を指す。2-3節に聖霊の顕在(Manifest)が見られる。「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」とあるが決して激しい風が「吹いてきた」、「炎の舌」が現れたとは記されておらず、激しい風が「吹いて来るような音」”(a sound like the rush of a violent wind)、そして「炎のような舌」”(divided tongues, as of fire)と言われている。この「ような」という所が重要なのである。なぜなら激しい風が吹き、炎の舌が一人一人の上にとどまったという不思議な現象が起きることが、聖霊が降った「しるし」、だと考えてしまうことになるからである。聖霊は目には見えず様々なイメージで顕れる。その一つが天からの「風」である。「風」と「霊」とはギリシャ語の語源が同じであり「舌」としても顕れる。これは、聖霊が神を証する言葉であるからである。詩編104:30(別の訳の聖書より)「あなたが霊を送られると、彼らは造られる。あなたは地のおもてを

新たにされる。」旧約聖書時代は霊が降ったしるしは「風」であったが、ユダヤ教の時代になると神の霊は「光」と「大きな音」、つまりそのような「しるし」を伴って降ることがある、と考えられるようになった。出 19:18「シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。」出 3:2-3「そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

さらに「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした」という場面について考えていきたい。五旬祭に「聖霊の内在」(indwelling presence)と聖霊の満たし(The Fullness of the Holy Spirit)が与えられた。聖霊の臨在は、エイレナイオス『異端反駁』第 5 卷 28 章 4 節に記されていたように人間から離れることはない。キリストが「肉体」を取り、その「肉体」に聖霊が「内在」という仕方で、臨在するようになる。このように「御子の受肉」を境に、聖霊の臨在の仕方は、人間のうちに内在するという方法を取るようになる。コリントの信徒への手紙一 6 章 19 節「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」ローマの信徒への手紙 8 章 11 節「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた

方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう」ヨハネによる福音書 14 章 20 節「かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内におることが、あなたがたに分かる。」ヨハネによる福音書 16 章 8-9 節「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと。」

ローマの信徒への手紙 8 章 14 節「神の霊によって導かれる者は皆、神の子である。」聖霊は信徒が聖書を理解し、祈りを豊かにし、教会と世界にとりなしをしてくれる。また、生活に聖霊の実を实らせて、愛とキリストの新しい命があることの証拠を示される。

「聖霊の内在」と「聖霊の満たし」はローマの信徒への手紙 8 章 9 節のように対象が一致している。その対象はキリストである。「神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。」

使徒言行録 2 章 4 節の「聖霊の満たされる」はアオリスト時制で、ある変わり目に起こることである。この出来事は継続するという意味である。聖霊が降り二つの現象が発生している。

最初にそこに集まった人々がみな「聖霊に満たされ」たこと。ここで「満たされ」とは、1 章 5 節「ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられるか

らである」と11章16節「そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。」とある聖霊の洗礼、2章17-18節「神は言われる。終わりの時にわたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。」と10章45節の霊の注ぎ、「割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。」そして10章47節の聖霊を受けることと似ている。

「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」と言った。」第二に、そこに集まった人々は、聖霊が語らせるままにより「他の言語（ほかの国々の言葉）」で話し始めた。

19世紀の哲学者・キルケゴールの父ミカエルは敬虔なキリスト者であり、父はその息子セーレン・キルケゴールの誇りであった。ミカエルは幼い頃とても貧しく牧場で牛を追って暮らしていた。ある日、天候が荒れ大変寒く暗く激しく落雷し、とても恐ろしい思いをしたことがあった時、ミカエルは恐怖の余り、「次々にこんなひどい目に遭わせる神を呪った」ことをキルケゴールが知った時純粋なキルケゴールはミカエルのしたことを「聖霊に逆らう」決して許されない罪であると捉えたのであった。風にしても、炎にしても、旧約以来の、神様の御臨在を示す象徴である。ここで告げられていることは、何とも神様による御業としか言い

ような出来事が、弟子達の上に起きたということである。

5 節「エルサレムには天下”(every nation under heaven)のあらゆる国から帰って来た、信心深い(faithful Jews)ユダヤ人が住んでいた」と語っているように、彼ら(Diaspora Jews)は世界のあらゆる国々の人々を象徴して登場する存在であったと考えることができる。

集まって来た人の多くが、6 節の「この物音に大勢の人が集まって」来た。これは 2 節の「激しい風が吹いて来るような音」ではなく、4 節のほかの国々の言葉で、「自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて」あっけにとられてしまったのである。7、8 節「人々は驚き怪しんで言った。『話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。』 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。」聖霊は、人との関係を通して働く。

人は人の言葉によって信仰に導かれ、信仰の仲間と一緒に食事をし、共に苦しみ、共に喜ぶのである。人々はこのペンテコステの出来事が創世記のバベルの塔の出来事と対比できる、人類史上に起った大きな出来事と考えてきた。バベルの塔の物語では、人間はその不遜さによって、同じ言葉による意志の疎通ができなくなり、世界に散らされたが使徒言行録 2 章ではバベルの塔の出来事とまったく逆のことが起こっている。彼らは突然、異なった言葉を話し始め、神の言葉が異なったあらゆる世界に入っていった。しかし、彼らは一致している。異なる言葉を話しながらもはやバベルではないのである。人間の力によっては克服できなかったことが聖霊が降ることにより、育った環境や、国や民族を超えて、「異なるもの」ではな

く、仲間・兄弟として共に生きる者たちとされた。これこそが最初のペンテコステの出来事において始まったことなのである。ペンテコステの出来事を信じるという事は、理解するという事ではない。今も、あの2千年前と同様に、“聖霊は私たちの心にも注いで下さる”という事実である。聖霊が人の心に「注がれる」時、人は主の証し人として変えられるのである。この「注ぐ」というのは水道の蛇口からポタポタ垂れることでも、湧き水がチョロチョロ流れていることでもない。雨がザーザー降り注ぐとか、水をジャバーッと注ぐように、多量であること、豊かさを表す。注ぎ方も、思いきり、遠慮しないでザーッと惜しみなく注ぐのである。注ぐ=豊かさ。旧約時代にも、聖霊はイスラエルの民の心に働いていた。そのためイスラエルの民も、目に見えない神を信仰することができたのである。聖霊の注ぎ、聖霊の臨在が、福音としての十字架を教えてくれる。それまで十字架は悲しいニュースであった。しかし、聖霊の注ぎによって十字架の死は復活の喜びの福音となったのである。この喜びのニュースとして、十字架を信じた者の心の中で、1つの出来事、すなわちキリストが愛の力ある支配（導き・管理）という天国の先取りが始まる。

9-12 節「わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らが

わたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。」ここにいた人たちは、他の言語「ヘテライスグロスサイズ」で話し始めた。この「ヘテライスグロスサイズ」は文字通り、他の言語である。使徒言行録の著者ルカは9節と10節で地名を列挙した後、11節の「ユダヤ人と改宗者」という言葉でここに挙げた人々を宗教的観点から総括した。これらの地名は何を意味するのであろうか。最初に出てくるパルティア人は、当時ローマにとっても、侮りがたい強国。続くメディア人とエラム人という呼び名は、遠い過去に属する呼称であり、ルカは当時の世界だけではなく、過去と未来の世界史に現れる民族をも包括しようとしていることを暗示している。彼らが聞いたのは、「神の偉大な業を語っている」言葉であった。聖霊に満たされた人々から聞いたのは、神の御業を誉め讃える賛美の言であった。

「聖霊に満たされた言葉」は、初期のキリスト教はローマ帝国に「パクス・ロマーナ」（ローマの平和）に対抗し「パックス・クリスティ」（キリストの平和）を叫び、戦争と征服と分裂の秩序ではなく、平和と犠牲と一致の秩序を与えた。日本にキリスト教を布教したフランシスコ・ザビエルは日本語があまり上手ではなかったと言われている。しかし、聖霊が言語の壁を乗り越えさせてくれるので福音と相いれない言語は存在しないのである。キリスト教が世界中の国々に伝えられ、国々の言葉で宣べ伝えられているという事実が聖霊の大きな力を思い起こさせる。言語や文化における問題や困難にぶつかっても、努力しつつ超えていく力



を聖霊は与えてくださるということを、教会の母体である十二使徒は体験したのであった。

教会は、社会学的に言えば、イエス・キリストを信じる人の共同体であろう。しかし神学的に言えば、それに先立つものがあり、それは聖霊を受けてイエス・キリストに召された人の群れである。たとえ自分の意志でここへ来たと思っていたとしても、実は神様が導いてくださり、ここに一つの群れを作ってくださいました。それが教会である。そしてまた、この群れそのものが神の息を受けて生かされているのである。

パウロは、「人の心を見抜く方は「霊」の思いが何であるかを知っておられる」と言う。「人の心を見抜く方は、人の思いが何であるかを知っておられる」ではない。神様は私たちを聖霊の働きを通して見つめて下さる、ということである。その聖霊の働きとは、私たちのために執り成しをして下さることである。

13節「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ。」というあざける者の言葉であるが、実はこの「酔っている」という言葉もまた聖霊に「満たされる」という言葉である。これは、1節、2節、4節とは異なる語源を持つ別の言葉であるため、私たちはここで人間は神の思いで自分を満たすことを求めるのではなく、それ以外のものでも自分を満たそうとすること示される。「あざける者」は、エルサレム土着のユダヤ人たちで、むしろ敬虔でない自然人。彼らは、この神様のみわざを驚きと捉えることができず、新しいお酒の酔いであると合理化している。自然を超えた出来事への驚きは、信仰への第一歩であり、それを合理

化してしまうことは、不信仰と無知を露呈することになってしまう。聖霊は、コリントの信徒への手紙一 14 章 2 節に「異言を語る者は、人に向かってではなく、神に向かって語っています。それはだれにも分かりません。彼は霊によって神秘を語っているのです。」という。ローマの信徒への手紙 8 章 26 節で「同様に霊も弱い私達を助けて下さいます。 私達はどう祈るべきか知りませんが、“霊”自らが言葉に表せないうめきを持って執り成して下さるからです。 」と語る。 苦しみのある時うめきのある今、 救いのために人間もうめく時、聖霊なる神が私達の中に共に居てうめいて下さる。神の霊はあるところにおいてその人が、「忘我状態」になることもある。旧約聖書のサウルは神の霊を受けて「忘我状態」になり、預言を始めた（サムエル記上 10:10～）。はたから見ると、正気でないかのように見えるかもしれないが、見る人が見れば分かるということである。

サム上 1:12-14「ハンナが主の御前であまりにも長く祈っているので、エリは彼女の口もとを注意して見た。ハンナは心のうちで祈っていて、唇は動いていたが声は聞こえなかった。エリは彼女が酒に酔っているのだと思い、彼女に言った。『いつまで酔っているのか。酔いをさましてきなさい。』ハンナは答えた。『いいえ祭司様。違います。ぶどう酒も強い酒も飲んでおりません。ただ主のみ前に心からの願いを注ぎだしておりました。』」

最後に聖霊の最も重要なお働きは何であろうか。それは、わたしたちに言葉と霊の人格ある「信仰」を与えてくださるということである。

## コリントの信徒への手紙一 14章6節

「だから兄弟たち、わたしがあなたがたのところに行って異言を語ったとしても、啓示か知識か預言か教えかによって語らなければ、あなたがたに何の役に立つでしょう。」